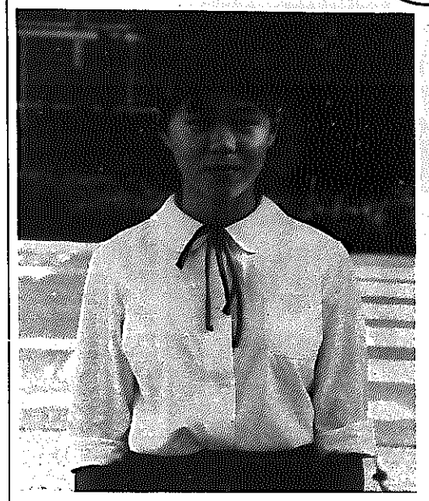
人

三市中蒲原少年の主張で最優秀賞を受けた中川尚子さん（西酒屋・大鷲中三年）、聴衆もじっと聴き入っていました。



「ほかの人はみんな上手だなあって思ってました。先生の指導のおかげです」と中川さん。本市からは初めての最優秀賞受賞です

九月九日、白根第一中学校で開かれた第八回県少年の主張三市中蒲原地区大会で、大鷲中学校三年の中川尚子さんが最優秀賞に選ばれました。この大会は、青少年健全育成を目的に、中学生に意見発表の場を提供しようと同地域青少年対策推進協議会などが毎年開いているものです。

当日は、本市からの三人を含む同地区内の各市町村の代表生徒十四人が、日ごろ考えていることなどを発表。中川さんも、七百人の聴衆を前に「友人たちから学んだこと」と題して、堂々と自分の意見を主張しました。「よその生徒もじっと聴いていてくれました。受賞者が発表されても本人は〝信じられない〟とびっくりしてましたよ」と、近藤欣一校長は笑顔で話します。

学校では生徒会副会長を務める中川さん。学校の行事などを今までと違う方法でやりたいと思い、自分から立候補したそうです。

指導に当たった片桐憲吾先生は「明るく積極的な生徒で、ひたむきなところもあります。大会での発表を聞いていて、私にも感動が伝わってきました。何よりも、この主張を通して彼女自身の成長が感じられたことがよかった」と感想を語っています。

中川さんは九月二十八日の県大会に臨み「受賞に関係なく、自分の意見をみんなの前で正直に発表するよう心がけたい」と、話してくれました。

友人たちから学んだこと

私が生徒会副会長になってから、もう五か月が過ぎようとしています。「難儀だなあ」と思うこともたくさんありましたが、今日まで夢中になってやってきました。その中で、考えさせられたことがたくさんあります。

私たちの生徒会に図書委員会という委員会があり、図書の貸し出しや新刊紹介、読書調査など、活発に活動しています。その図書館でのことです。図書館をよく利用するのはいいのですが、本を出しっぱなしにしたり散らかしたりして、ときどき叱られていたのです。ところが、今年は今までと違って、いつ図書館に行っても、きれいに整とんされているのです。図書館の本箱や、ちょっとした道具や掲示物が、それぞれに工夫されていて、なんとなく、きちんとした気持ちのいい館内になっています。

そればかりでなく、その委員会の人たちが、当番や決められた仕事をさぼったりはせずに、みんなが注目するくらいまじめに仕事をしています。だれが見ても「まとまり」のある委員会です。

私は、新しく図書委員長になったA君に尋ねました。「どうして、こんなまとまりのある委員会になったの?」。A君は「特別に何もやっていないよ」と、伏し目がちにぼそっと言っただけでした。私は、それから少し注意してA君の行動を見るようになりました。A君は、今までの活発な委員長たちと違って日ごろは目立たない、おとなしい性格で、あまり自分から話をするような人ではありません。彼が図書委員長になったのは「A君は本が好きだ」という理由だけだったと記憶しています。

彼の行動を見ているうちに、いろいろなことがわかってきました。彼の姿が見えないと思うと、必ずと言っていいほど図書館にいるのです。みんなが遊んでいる昼休みでさえ、そうなのです。そして、少しでも本が曲がっていたり、別な所にあったりすると、直しているのです。図書館のあちこちを見ながら考え込んでいることもあります。いすなどがとび出していると、一人で黙々とそれを直しているのです。それも一言の文句もぐちも言わずにやっているのです。私は、そのまじめさ、責任感の強さにびっくりしてしまいました。

私は、A君を見る目が変わってきました。尊敬の念がわいてきたのです。リーダーのこのまじめさ、熱心さが、下級生たちを動かしているのではないか。そして、いつもきれいな図書館だからこそ、使う人たちも自然に散らかすことも少なくなってきたのではないか。きっと、そうだと思います。私はリーダーの一つのあるべき姿を学んだ気がしました。

こうしたことは、生徒会長のSさんの、常に全校のことを考えて、すばらしいアイデアを出すことに、あらためて感心したり、今までは、ただ、ぼうっとしている人だなあと思っていた事務局長のE君が、てきぱきと仕事を進めていくことに、目をみはり、新しいE君を発見したことなどにも言えることなのです。

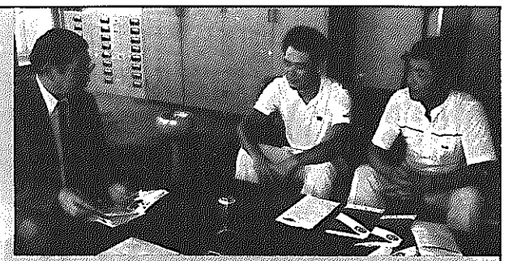
私はそれまで、人を見るとき、勉強のできる人をうらやましがったり、スポーツで活躍する人にあこがれたり、どちらかというと、目立つ華やかな外面を見て、それを尊敬してきたのだと思います。私自身も、自分の勉強や部活のことだけに一生懸命でした。しかし、地味だけれども、みんなのために一生懸命に考え、行動することの大切さ、すばらしさを知りました。

いろいろな人が、みんなそれぞれに、隠れたすばらしいものを持っていることに気づきました。そう思って周りを見ますと、尊敬できる人たちがいっぱいいるのです。そして自分に足らないものが、まだまだいっぱいあることを知りました。これからも、友人たちのすばらしさから学んで、自分の中に、しっかりした中身を作ってゆかなければならないと思っています。

中国を訪ねて

（中山　浩さん）

県農業者友好訪中団として、市の推薦で中村恒志さん（中山・37歳）と中山浩さん（瀬ケ通・26歳）が参加して中国の人たちと交流し、施設などを見学してきました。これは県が成果を地域の農業振興に生かそうと実施しているものです。レポートは、中山さん（右の写真中央）にお願いしました。



訪中を終え、市長に報告する二人（8月11日、市役所で）

第八次新潟県農業者友好訪中団（一行三十人）に、白根市から中村恒志さんと私の二名が参加し、七月三十日から八月八日の十日間の日程で中国を訪問してきました。

初めての異国の地、不安と期待でいっぱいの中、中国の玄関口、上海入り。どこを見ても大地平線、そして自然の雄大さ、美しさには驚くばかりでした。

団一行は、上海市、黒竜江省、北京市の各都市の人民政府、人民公社、そして農業科学院、研究所などを視察し、中国農業の現状や生活環境を、この目で見ることができました。

中国の農業は、人民公社、生産大隊、生産隊で営まれています。また、定年制があり、場所によって違いますが、北京では男子が五十五歳から六十歳まで、女子が五十歳から五十五歳までの間に、自分の体力に応じて退職できるようになっています。社会主義国家のため、農民はいっさい自分の土地を持たず、日本のように年を取っても自分なりの仕事を行うというわけにはいかないようです。

黒竜江省ハルビン市、人民公社内の農家の人がキャベツとナスを収穫しているところ。私たちが近づくと、作業の手を休めて迎えてくれた

黒竜江省の省庁の人たちが開いてくれた歓迎会。中国では日本の歌が流行している

上海では、稲二回、麦一回の三毛作で、年間収穫量は一㌃当たり十三・六㌧。化学肥料はあまり使わず、有機肥料を一毛（六・六㌶）につき年間千キロ㌔使用します。

ちょうど二回目の稲が栽培され、まだ出穂前でした。草丈は短く、茎は太く硬い稲には驚きました。また、用水の設備として、パイプライン方式でもありました。

野菜は、五十種類以上が栽培され、冬場はハウスでと、年間を通じて生産されています。

黒竜江省は、畑作が中心です。ここでは、無雪期間が百三十日とたいへん厳しい気象条件の中で取り組まれています。園芸試験場では、栽培技術などの研究が盛んに行われています。

北京は、上海とハルピンの中間に位置しています。ここは都市化が進み、街には高層ビルが建ち並び都市開発がめざましい所です。

現在の中国農業、産業、そして生活水準の遅れ、低さは、話には聞いていましたが、想像以上でした。なおいっそう、日本の豊かさを知ることができました。

その半面、考えさせられることもありました。農地の維持と若返りのため、有機肥料が活用されています。化学肥料、農薬に頼る我が国の農地、農業を見直さなければならないと痛感しました。

北京の故宮（こきゅう）を観光。明・清朝2代にわたる皇宮で、広い敷地に似たような宮殿や楼閣が60あまりある。一度はぐれたら二度と会えない感じだった

農業以外でも、たびたび驚かされることがありました。

上海の公園に行った時のことです。暑い時期だったため、公園は木陰に涼を求めに来る人でいっぱいでした。歩いていると、二十五歳くらいの向こうの若者が、滑らかな日本語で話しかけてきました。驚いている私たちに、彼は独学で日本語を勉強し、日本に一度行ってみたいと思っているなどと説明してくれました。ホテルでも若い人によく話しかけられました。生の日本語に触れてみたくてしょうがない様子です。言葉だけでなく日本のあらゆることに相当な関心を持ち、熱心に勉強している。これは特に若者に感じられました。

同じく上海の少年宮では、各地域の小学校から選抜された子供たちが、習字や音楽、スポーツなどの高度な訓練を受けていました。小さい子がスラスラとうまい字を書く習字、ピアノ演奏、パソコン操作などを見て、日本の教育との違いを感じました。ここでさらに優秀な子供は、学費を国から負担してもらいながら専門学校へ通えるそうです。

中国の国土は日本の二十六倍。この広大な土地、資源を持つ国に日本の農業技術が提供され普及すれば、近い将来、世界一の農業大国に発展することでしょう。そんな中国へ、機会があったらまた行きたいと思います。